

末法の世に仏法を伝えるタイムカプセル 県指定史跡 東城寺経塚群

東城寺経塚群は、土浦市東城寺字薬師脇及び字九社境外にある遺跡で、茨城県の文化財（史跡）指定を受けています。この遺跡は、平安時代末期〔12世紀〕に、仏法を将来に伝える目的で法華経等の経典と鏡など様々な物を埋納した遺跡で、東城寺境内の西側海拔160mの斜面に立地しています。敷地には12地点の経塚が集中しており、中でも一番大きいものを大塚〔1号経塚〕と呼んでいます。ほとんどの経塚は、大塚周辺から東の山道にかけて点在しています。



写真1 東城寺経塚群



写真2 1号経塚〔大塚〕

東城寺経塚群からは、保安3（1122）年と天治元（1124）年銘の経筒が出土し、東日本の経塚遺跡の中では、長治元（1104）年の栃木県下野市小野寺経塚に次ぐ古さです。また1つの遺跡に10地点以上経塚が群在する類例は、東日本では宮城県南三陸町田東山経塚〔11地点〕と福島県須賀川市米山寺経塚〔10地点〕しか見られないことから、年代の古い点と大規模である点が特徴として指摘できます。

この遺跡が全国的に有名な理由は、明治時代に東京帝室博物館の和田千吉によって、学術的な調査が行われた初めての経塚遺跡である点にあります。和田の調査では科学的な分析によって経塚造営当初の形を復元し、経筒に刻まれた銘文の解読から造営者が当時の有力豪族である常陸平氏であることを明らかにしました。その成果は、明治37（1904）年に雑誌『考古界』（第4篇第5・6号）の「常陸国新治郡東城寺村経塚の研究」の中でまとめられています。

和田の研究以後、全国的に経塚の調査事例が増えていきますが、東城寺経塚群の発掘調査は科学的な態度に基づく先駆的な業績として評価されています。以下、和田報文に基づき、発掘時の状況を振り返ってみます。

経塚を発見した経緯は、明治23（1891）年7月に馬を引いて山道を下る途中の人が偶然地上に青銅製品を発見したことに始まります。同月に当時の土地所有者が発掘を行ったところ、経筒などを発見しました。当時の出土品は、警察署に以下のとおり届出されました。

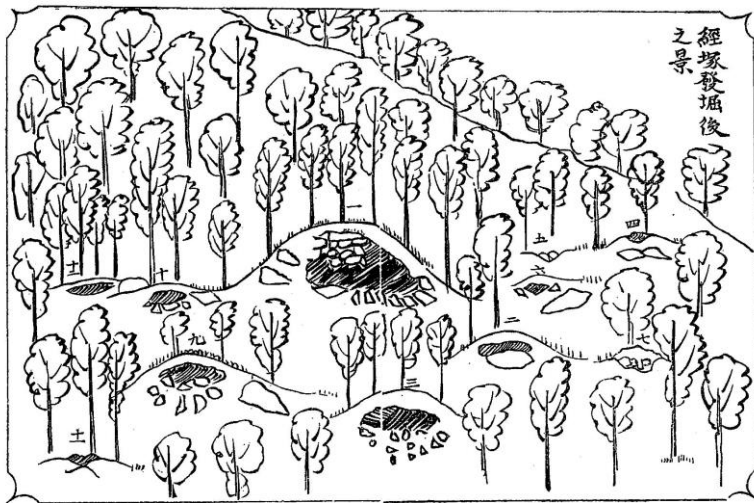
銅製経筒	6個	蓋	2個
和鏡	10面	銅製花瓶	2個
銅製小皿	6個	赤色素焼花瓶	1個
青色壺	1個	赤色素焼皿	数個
鉄製椀	数個	短刀	125片

白色ガラス小玉 27個
写経（銅釘付） 数巻

青色ガラス小玉 24個

以上のうち、後に東京帝室博物館に買い上げられたもの以外はすべて散逸し、現在は所在不明となっています。

明治35（1902）年6月、地元の郷土史家が和田に書面で質問を行い、現地調査を希望しました。同年7月20日和田は東京を出発し土浦の郷土史家宅を訪問、22日東城寺村の土地所有者に出土時の様子を聞き取り調査して、所蔵の写経断片と和経1点をもらいました。同日、案内を受けて1日経塚の発掘を行いました。大塚からかわらけ1点と鉄製椀1点を得るほかは、未発掘の経塚は発見されませんでした。発見品の一部は、後に東京帝室博物館の所蔵となり、現在は東京国立博物館が伝えています。



「経塚発掘後之景」(漢数字は経塚の番号を示す)

図1 経塚発掘後の状況（和田報文より）

天治元（1124）年銘の経筒は大塚（1号）出土で、毛彫で以下の銘文があります。

「保安三年大歳壬寅八月十八日甲辰
如法経书写供養願生
聖人僧明覚大檀越平朝臣致幹
為□法界衆生平等利益所
奉遂果如右敬白」

保安3（1122）年銘の経筒は3号経塚から出土、以下の銘文が陽刻されています。

「天治元年歳次甲辰十一月十二日乙酉
奉安置銅壺一口
行者延暦寺沙門経連
大檀那陰子平致幹

その他銅製経筒が4点ありましたが、現在伝えられているのは上記2点のみです。他の出土品としては、鏡7面〔出土時は10面有〕、銅製花瓶2点、銅製皿〔六器〕5枚、ガラス数珠玉、土器花瓶1点、短刀、写経（法華経）、鉄製椀・常滑産甕・かわらけ〔現在無〕などがあります。和田の報告文に掲載された資料の一部は、現在東京国立博物館が所蔵しています。

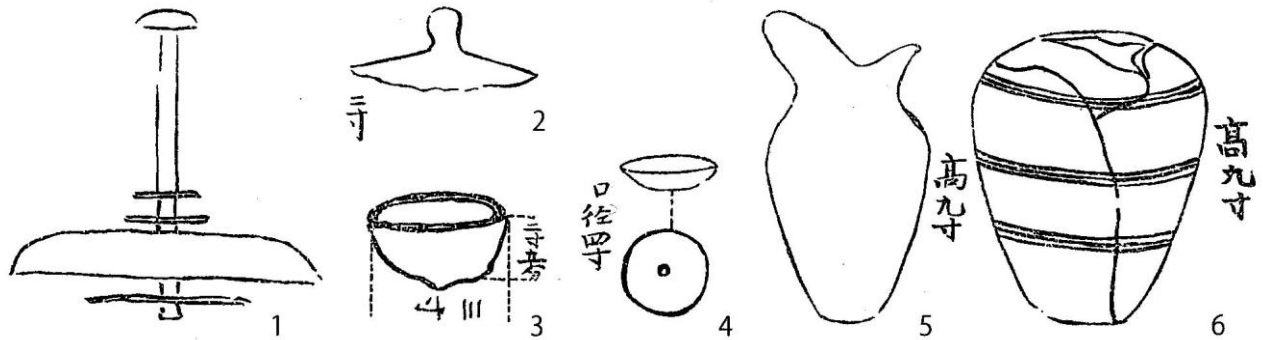


図2 経筒以外の東城寺経塚群出土遺物

（1・2 経筒蓋，3 鉄製椀，4 かわらけ，5 土器花瓶，6 常滑産甕）

2つの経筒に刻まれた文字は、和田以後の研究者も着目しています。両者に共通する「平致幹」は、平安時代中期から末期にかけて常陸国中央部から南部・鹿行地区にかけて勢力を持った常陸平氏の本宗家の人物です。後三年の役（1083～1087）時に致幹の娘が奥州清原氏に嫁する記事で著名な人物ですが、系図とこの記事、そして経筒の銘文は同時には年代的に成り立たない指摘もされています。天治銘の「願主聖人僧明覚」も天台僧として存在が確認されていますが、保安銘の「延暦寺沙門経連」と法孫関係にあるため、天治年間に存在するのは難しいようです。それらを踏まえると、大塚周辺の経筒埋納に際しては、後世の人物が先代の人物を顕彰する目的で経塚を造営したと考える説もあります。

また12基も集中分布する経塚遺跡は全国的にも稀であり、すべてが埋納を終えるには少なくとも20年以上を要すると考えられること、また常滑産甕など出土品の一部に生産年代が新しい可能性のある事物を含んでいることから、この経塚群の成立には長い期間、場合によっては異なる時代をも想定する必要もあると考えられます。

現地は、東城寺境内の西側斜面から徒歩5分程度です。小看板に従い登り道を進むと、手すりも設置されています。市が敷地を管理し、文化財看板等も設置されています。機会がありましたら、一度現地を訪れてみてはいかがでしょうか。